★ 特集：漆喰の文化と伝統を継承する ★

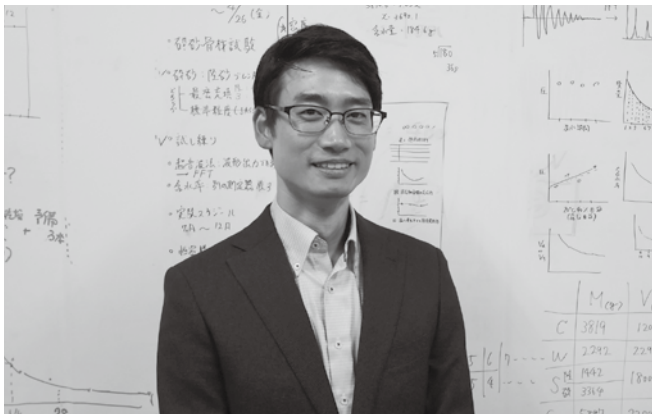
インタビュー

文化財の健全性を見極め、適切な補修をおこなう

職業能力開発総合大学校　特任助教　**岡 健太郎** 氏に聞く

文化庁が歴史的建築物の保存と活用を政策に掲げ、各地で保存修復工事と民間主導による施設利用が推し進められている。一方で維持保全の費用は大きな負担となっており、古い建物の中には、そのまま壊されてしまう建物も少なくない。

本稿では日本建築学会大会にて論文発表がなされた「伝統建築物における木摺り下地と漆喰の付着性の健全度を調べる非破壊検査方法」について職業能力開発総合大学校の岡健太郎特任助教より伺うとともに、これからの漆喰についての展望なども話を聞いた。（編集部）



▲「もっと多くの方々に左官の仕事を目にしてもらい、左官を知ってもらうことが重要ではないか」と語る岡氏

西洋の構造と日本の技術の融合

――近代建築物における漆喰仕上げについていかがですか

明治に入って日本は本格的に西洋建築というものを学ぶようになりました。それ以前、真壁は非構造部材として柱の間に挟まっているだけで、単に空間を仕切るような役目を持っていました。ところが西洋建築として施工されるようになった木摺り漆喰は柱に木摺り下地を直打ちし、そこに漆喰を直接塗るようになりました。つまり結果的に、耐力的な要素が壁にも付加されるようになりました。

外国における木摺り漆喰のルーツを辿ると、木摺り下地に漆喰を塗るという意味が、壁が壊れながら地震の揺れに耐えるというダンパーの役目を担っていた話もあります。一方我が国においては、それまで非構造部材として扱ってきた壁の施工方法では、解決しなければならない課題も多かったでしょうし、手探りの部分もあったと思います。まして日本は地震の多い国ですから、建物の揺れに対して塗り壁はヒビ割れも起こしやすい。土壁ならば地震で崩れた壁を壊して、土を練り直して、もう一度施工することも可能ですが、漆喰材料となるとそう簡単ではありません。また、西洋建築が入ってきた明治以降には、漆喰は壁だけでなく天井にも漆喰が塗られるようになりました。壁部材においては関東大震災以降、建物の耐震性と防火性の研究がなされたわけですが、天井は構造部材ではなく、非構造部材として分類されており、地震の揺れに耐えるという考え方が十分に検討されていませんでした。東日本大震災の際に東京・九段下の九段会館をはじめとして天井の落下が大きな問題となり、落下対策の策定が急速に進んでおりますが、湿式仕上天井をはじめとする古い工法の天井部材までは追いついていないのが現状です。その部分の健全度評価や、落下対策手法の検討・開発は急務であると思います。

――漆喰を内装に用いる利点はいかがでしょう

実用的な観点でいえば、調湿性と耐火性の意味合いは大きいと思います。日本古来の土蔵は耐火性のほか通気性が求められましたし、城郭建築についても耐火性に加えて外装であれば装甲板としての耐弾性の機能もあったと思います。世界遺産の富岡製糸場も現存最古の木摺り漆喰天井が繭の倉庫に保存されていますが、これも調湿性と耐火性という漆喰の機能を利用したものと言われています。建物の外壁や構造材が煉瓦やコンクリートなどであれば耐火性はありますが、屋根や天井の構成部材が木材の場合は耐火被覆という意味で内装に漆喰を施工していることもあると思います。

また、私が工学院大学の学生時代に調査研究した旧盛岡銀行本店本館（現・岩手銀行赤レンガ館）のほか、近代銀行建築物の多くは、店舗兼営業室が吹抜けの大空間となっていることが多く、モールディングやシャンデリアがぶら下